

## 堀合先生に学ぶ(3)

心のよりどころを作る、六月の保育観察より、

上垣内 伸子

1、五月二十八日 ビデオを見ながらの話し合い

まりますね。

五月の終わりに、先週撮った保育のビデオを見ながら、堀合先生と話し合う機会を持った。

堀合(以下H) そうですね。でもこの頃は外で遊ぶことが多い

ビデオでは、子どもたちが、次々と登園してくるの

K 外といえば、なかなかみんな園庭に出て行かないんです

を、堀合先生は玄関で迎え、上履きをはくのを手伝ったり、帽子とカバンを取ってロッカーにかけて上げたりと、一人ひとりに対して、その子に応じた対応をしながら、朝の時間を過ごしておられる。

ね。

H それがね、私が出なさいというところ、この頃はすぐに出ます

上垣内(以下K) はるちゃんは、やはりいつもの車の遊びが始

けれども、少ししたらすぐ帰って来るんです。ああ、三歳っていったら、まだ遊びが思うようにいかないから短いなだなと思っていたんですけどね、そうではないようなんです。今週は何か落ちつかないんです。

(ビデオをさして)この時はとてもおちついてますけれど、それは、私がいるからではないかと思うのです。みんながこうやって(ブロックで鉄砲を作ったり、粘土でかしわ餅を作ったりしている)ここで遊んでいると、すごく落ちついてるんです。

ところが、みんなが散らばってきて、「お天気がいいからお外に行ってもいいのよ」というと、「行く」って出て行くんですね。それで、私はほうほうをまわりながら、子どもたちの様子を見ることになるんですが、そうすると、何かみんなおかしいんです。

そこで、ちょっと考えました。子どもたちは、いままでも、お母さんと二人で過ごす時間というのがあったんだと。それも長くね。

特にはるちゃんは、車やブロック遊びをやっている時には安定してたのです。ところが、外に行くようになってからは、朝登園してくるとギヤーギヤーなんです。そして何か分からないけれど不安そうにいろんなことを言い出したんです。

みんなが外へ行くと、私も出ることが多くなるので、保育室はしょっちゅう私がいけない状態になるんです。そうすると、子どもたちは不安になるんじゃないかと思ったのです。それで、少しやり方を変えてみようかと考え、なるべく保育室にいるように心がけたのです。

すると、はるちゃんも、外へ行くんだけど、「あら、帰ってきちゃったの」というくらい早く帰ってきて、部屋の中でしか遊ばないのです。お母さんが常にうちの中にいて、そのそばで遊んでいるという安定感っていうのが、ここでも必要なのではないかなと思えてきました。

今日あたりも、外から「こはん?」「お弁当?」っていつて入ってくるけれども、部屋に入ってくると、こういう遊びが始まり、落ちつくのです。

K そのことなのですが、堀合先生の保育を見せていただいていると、母子関係と同じだなと感じることがよくあります。アタッチメントの成立という観点から見ると、共通する部分が多くあるように思います。今のお話を聞くと、一人歩きを始めた幼児が、お母さんを基地にして、探索活動

を始める姿が浮かんできました。

H そうですね。また、本当に、この頃の子どもは、赤ちゃんのようなところがあるのです。それに、今年のお子さんは、生まれ月も、一月、二月と、後半の人が多いので幼いのです。それで、私はいわゆる幼稚園児としてお子さんを受け取ってきたけれど、ちょっとそれを変えなくてはいけないと思つて、今日あたりから始めてみたわけです。

K 保育者の存在を、お母さんからおうちにいらっしゃるときのある方と近い形にということでしょうか。

H そういうことになると思います。今まで少し離しすぎたかもしれない。いわゆる幼稚園児としてうけとつたけれど、そうじゃなくてやってみようと思つているんです。

K そうですね。どの子どもも、先生との関係が安定したときに、自分から園庭へとか、いろいろと活動を広げていくように、「今日はいいお天気だからお外に行きましょう」といわれて行くのではなくて、自分から出て行くようになってほしいですね。

H そうそう、そうなんです。

K 子どもの保育者とのそういうつきあい方が、まさしくお母さんとのつきあい方と同じようなものになっていくというのは、大切なことだけれども、なかなか難しいようにも思えるのですが。

H だから、若い方は、お姉さんでいいと思います。全く見知らぬ違う世界に来たっていうのでは、もう不安でしょうがないし、そうしたら、何も自分で力が出せないでしょうし。

突き放したわけではないけれど、「いいわよ」って言って、「必ず帰ってきてね」といつてきたけれど、何か少し不安だったようです。それで、私は、これは大変だと思つたのです。

K 幼稚園の楽しい雰囲気に乗せられて、ちょうちょのように、ひらひらふわふわと出て行って遊んでいて、最近になって初めて不安なことに気がついて、戻ってきたのかも、しれないですね。

H そうなんですよ。

K 三歳児の保育の中で、大切に考えていかななくてはいけない

部分ですね。

H そうですね。

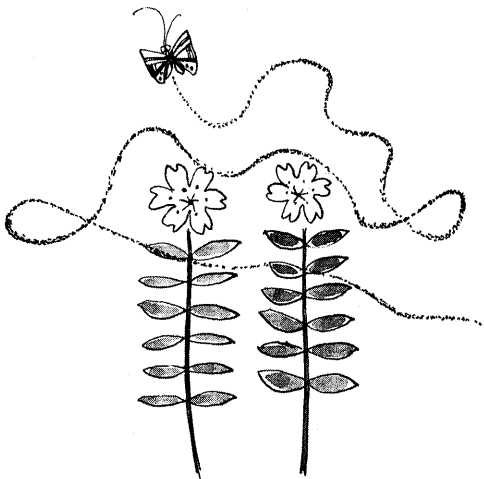
この人達、神経はすごく鋭いんですよ。だからやっぱりちょっと不安になるときがあるのでしょう。ですから、三歳の時はよっぽど暖かい雰囲気を作ってあげないと。

K 家庭が子育ての基盤ということは、ごく当たり前のことなんです。子どもの幼稚園での姿を見ていると、あらためてそのことに気づかされます。

H だから、家庭がちょっと広がって、一人、先生っていう家族がふえたんだと。お母さんは忙しいときにはいけないけれど先生がちゃんという、また、先生がいけないときにはお母さんがいるというような、場所は違っても大きな家族のよくなるものにしてあげないと。

はるちゃんなんかは、すごくそれがあると思うんです。門のところへ行つて、「ママ、ママ」って言ってるでしょ。あの人の場合、初めはそうじゃなくて、途中からです。やはり何かふと寂しさを感じたのではないかとね。それで、ちょっと考えなおさなきゃいけないと思つたのです。

子ども達のはじめて散らばり、遊び始めたのに、どうも遊びが続かない、何となく落ちつかない、このような状態を、堀合先生は、心の抛り所となる保育者が、自分達の間である保育室にいつも存在し、文字どおりの安全



基地となることによって変えていこうと考えられたようである。入園期に、一対一の関わりを通して信頼関係を作っていくことも、家庭と乖離しないなじみのある暖かい雰囲気を作っていくことも、自明のことであり、保育者であれば誰もが大切にしていることであろう。けれども、それをどのような形で表していくかとなると、むずかしいことかもしれない。一人ひとりの子どもが、異なった思いや背景を持って入園してくるからだ。従って、定型などはなく、子どもに関わりながら見つけたこととなる。

今年の堀合先生のクラスには、何人かの特に目の離せない子どもがおり、その子達を追って動きまわられていた。その結果として、保育室に保育者がいないことも生じ、その何人かの子ども達だけでなく、他の子ども達も、何となくおちつかなくなったり、不安になったりすることとなる。この日のビデオに見られた子ども達の動きには、遊びが長く続かずふらふらしたり、先生についてあちこち歩いたり、中心がないと感じさせるところ

があった。先生との関わりは十分にあり、保育室の環境もいごちよいもののだが、肝心の先生がそこにいない。子ども達の中に感じられたおちつかない気分に対して、先生はさらに追っていつて関わりとうとするのではなく、反対に、追うことはやめ、幼稚園における子ども達の生活の拠点である保育室にしっかりと留まることによって、子ども達の心の拠り所、中心を作ろうとお考えになったのであろう。

## 2、六月五日 保育観察

ビデオを見ながら話をうかがった一週間後の六月初め、今度は保育を観察させていただいた。

この日は、お面作りをしている子どもが多く、思い思いの絵を描くと、先生に切りとってもらい、帯をつけてもらっている。先生は保育室一角の、紙などがおいてある棚とピアノの間に立って、対応されている。

この時期、先生が最も気にしておられたのは、はるちゃんである。彼は、昼食や降園になっても、なかなか

部屋に入ってこない。これまでは、時間ぎりぎりまで遊ばせてから誘うが、帰ってこないのひっぱってくることや、みんなが見ているのにいやだなと思いがら、無理に着替えさせたりなさることもあったようである。しかし、この週、「私もいやだけれど、はるちゃんだってひっぱられるこの感覚はいやなんだろう」と思われ、その翌日から、呼びに行かないことにされた。呼びに行くのではなく、安心して帰ってこられる場を作ることを選ばれたのだと思われる。すると、その日は、お弁当になつたら帰ってきたそうだ。

この日、私は、その前の話し合いを受けて、堀合先生の動きを中心に観察したのだが、話されていた通り、ほとんど保育室から離れることがない。そしてもっぱら、製作コーナーの棚とピアノの間に立たれている。先生がそこを離れた時に、さっと同じところに行つて立つてみた。驚いたことに、そこからは、保育室の中はもろんなこと、園庭が遠くの砂場のところまで見通せ、裏庭も見える。クラスの子どもの（さらに言うならばるちゃん

の）活動範囲のほとんどを見渡せる場であった。そこに立たれた先生は、はるちゃんの姿を目で追い、保育室から出て行くとはされない。ときどきテラスあたりまで、ようすを確かめに行かれるが、決して外へ出ては行かない。ここにいと強く決意され、意識的に留まつておられるようにみえる。

先生が保育室にいらつしやることで、子ども達も落ちついてるように思える。

「さあ遊んでらっしゃい」と、できたお面をかぶらせてもらったりさことゆきは、ままごとを始めた。りょう、あかり、あみの三人は、ロッカーに並んで入り込んで絵本を見ている。しょうた達も大型積み木を長く並べると、電車ごっこらしきものが始まる。二週間前と比べて、遊びが発展し、子ども達も以前より打ち込んでいるように見える。

昼食前の片付けが始まる頃、はるちゃんが外から戻ってきた。積み木の電車の先頭にすわったり、りょうが先生の背中にあるのを見て自分もおぶさったりして楽しん



◀ ここからは園庭まで見たすことができる



▶ 目はいつも子どもの動きを追っている

でいる。前回よりも心なしか表情は柔らかい。はるちゃんは、先生の姿を見つけて戻ってきたのかも知れない。そうでなくとも、園庭にいたはるちゃんからは、保育室にいる先生の姿は見えていたに違いない。「だって、お母さんがうちにいなくて、どこにいるのか分からないんじゃない不安で何もできないでしょう」という先生のことばを思い出し、「子ども達が見渡せる場所にいた先生は、子ども達からも、どこで遊んでも姿を確かめることができたのだ」と気づいた。子ども達は、先生の存在を心の中で確認し、安心感を持って過ごしており、それが落ちつきと私に感じさせたのであろう。

入園してきた子ども達が、保育者との信頼関係を形成し、安定して自分を表し遊べるようになるには、一対一のしつかりとした関わりが必要であり、堀合先生も、入園当初（そして今も）、一人ひとりの要求に応えたり、ていねいに身じたくの手伝いやけがの手当などの世話をされ、そこからしつかりとした関係を作り上げていこうとされている。そして、今、それに加えて、信頼できる

存在であるところの保育者が、生活の拠点である保育室に留まることで、安全基地となり、安定して遊べることを援助されている。子どもへ向かうベクトルは逆向きに見える二つの行動だが、子どもの安定感と自己活動の援助という点で共通しているように思う。このことを、先生は、はるちゃんをはじめとするクラスの子どもの表情や動きから気づき、対応されている。知識としての理解と、実践の間には、深い洞察と努力というハードルがあることを確認すると同時に、常に子どもから学ぶという姿勢を貫いておられる堀合先生から、私もまた学ばせていただくという思いを新たにしました。

（十文字学園女子短期大学）